

昭和二十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授承認誌第三五二號
昭和二十四年四月廿八日印刷 昭和二十四年五月一日發行

浄土

第十五卷 第五號

五月號

良寛さま 吉田絃二郎

徹水上人の想出 相馬愛藏

僧伽と社會 佐藤賢順

浄土教の本質 眞野正順

1949

5

宗 教 病

明治四十年、三十五歳にして世を去つたすぐれたる思想家、深き宗教體驗者網島梁川は、「宗教病」について語つてゐる。

宗教病にかかつたものの第一の症状は、すべてのことを宗教的な色眼鏡を通じて見、すべてを宗教的な聯想でむすびつけてしまふ。花や月を眺めても、その美しさ清らかさをたたえることなく、直ちにこれ神、これ如來と想う。科學に對しては、その眞理性を尊重せずに、直ちに神の絶對をたたえる。このような心情にある宗教病患者は、それ故に、ものごとを、自分の狭い、淺い立場から眺めて、いたづらにほかのものをけなす傾向が強い。

第二の症状は自足病、幸福病とでもいうべき症状を呈する。ただむやみにありがたがり、もつたいながつてばかりゐて、進んで新たに向上の道をひらく事をしない。幸福もよし、満足もまたよい。だが、進歩のない、向上のない満足・幸福はいたづらなる退嬰にしかすぎない。宗教批判は色々の角度からなされるだろうが、こゝういつた、内面からの、宗教體驗者自身の實感から割り出された告白こそ、大いに學ぶべきであらう。(松濤誠齋)

目 次

淨土教の本質(四).....	眞野正順(21)
雨の光明寺.....	佐藤初瀬(18)
谷・風(詩).....	鳥居良禪(6)
淡・想(歌).....	ふじたひろし(3)
良寛さま.....	吉田絃二郎(1)
徹水上人の想ひ出.....	相馬愛藏(4)
菩薩像とブローチ.....	小島章見(13)
木魚の話.....	若林隆光(7)
またたくま.....	安居香山(18)
さるとかに.....	合田微雪(16)
僧伽と社會.....	佐藤賢順(10)
會友の聲.....	(20)
芝園だより	



良寛
の
ま

吉田 絃二郎

先日、本間より遣候状は信に私に候。御あつけおき

申候錢たまはり度 以上

良寛

雄平老宛ての良寛和尚の消息である。托鉢して貰ひた

めた少かな錢であらう。それを雄平老人にあづけて置いたのかへしてくれといふのである。由來日本では佛者や文人が、錢の話をするを卑しいとされたものである。芭蕉の書翰集には旅に出るについて二分の金を貸して欲しいと書いたものが一つと、他にもう一つ金のことを記したのがあるくらゐのものである。

しかし手紙に錢のことを書いても芭蕉や良寛のやうな人の手紙は、ありがたさを増しこそすれ、卑しくはならない。あづけた錢をかへしてくれといふ言葉に良寛和尚の子供のやうな淡々たるものがうかがはれる。

子供のやうなといへばこんなたよりもある。

何卒白雪羔少々御惠たまはり度候。

餘の菓子は無用

沙門良寛

餘の菓子は無用といひ切つた老僧のわがまゝが面白い。無欲恬澹の風貌がほゞ笑ましい。

生涯懶立身 騰々任天真 囊中三升米 爐邊一束薪

何問迷悟跡 誰知名利塵 夜雨草庵裏 雙脚等間伸

良寛

囊中三升の米と一束の薪を貯へて、五合庵の爐邊に兩脚を伸ばして、悠々の境涯を楽しんでゐた、良寛和尚が偲ばれるが、和尚も人間であつた。天真爛漫の人間であつたゆゑ「何ぞ問はん迷悟の跡」などいひながら「雨の降る日はあはれなり良寛坊」と寂しがり、知人の家に住まはしてもらひながら棲居の不満もこぼす。

「如仰此冬は嶋崎のとやのうらに住居仕候。信にせまく

て暮し難候。暖氣成候ハ、又何方へもまいるべく候。酒
烟草茶恭納受仕候」

晩年老體には五合庵の冬の寒さは耐へなかつたので、
山を下つて町に棲居をもとめてゐたものと見える。鳥屋
のうらの住居の不自由さも思ひやらるゝ。

悟つたはずの良寛和尚ではあるが、出雲崎の海岸に佇
んで佐渡ヶ島を眺めては涙を流す。和尚の母上は佐渡か
ら嫁入りして來た人であつた。

たらちねのはゝかかたみとあさゆうに

佐渡のしまへをうち見つるかも

いにしへにかはらぬものはありそみと

むかひにみゆるさどのしまなり

このころの若い人たちは老ひたる親の手を引いて歩い
た過去の日本の姿をもう一度見なほすことが肝要であ
る。それについて良寛和尚がおかのとといふ女に書いてや
つた物の一部分を載せて見よう。

一、あさゆふおやにつかふまつるべき事

一、ぬひ（縫ひ）をり（織り）すべてをなごのしよさ

つねにこゝろにかくべき事

一、はきさうじすべき事

一、ものにさかるふべからざる事

一、上をうやまひ下をあはれみ、しやうあるものとり

けだものにいたるまでなさけをかくべき事

一、さいごしらひ、おしるのしたてよう、すべてくひ

ものゝことしならふべき事

一、よみかきゆだんすべからざる事

一、げらゝわらひ、むだ口、たちぎゝ、すきのぞき

よそめかたくやむべき事

今時の民主々義を唱ふる人たちのそれとはかなりのへ
だたりがあるが、これこそアメリカの清教徒たちの生活
法である。

法然上人も親思ひであられた。日蓮上人も良寛さんも

親思ひであられた。たゞその一事だけでも宗教は生きて
來る。

靜かな日である。縁端に椅子を置いて久し振りで落ち

着いた心で庭を眺める。考へて見ると朝夕眺めてゐる自

分の庭であつても、一石一木に至るまで落着いて眺める

ことは滅多にないものである。じつと眺めてゐると一つ

一つの石も一本一本の木も、それぞれのいのちを持ち、

思念を持つてゐる。

モンテーンは「われは人間よりも木を愛す」と言つたが、「人間よりも石を愛す」とも言へる。白隠禪師は舟で自坊入庭の石を運び入れた時、朝まだ暗いうちから、子供のやうに騒いで石の來るのを待つた。

わたくしの庭に鞍馬と加茂と貴船の石がある。時雨に濡れてわびしく、淡雪につままれてあはれに、春雨に降られて悲しく、春光に熙々として嬉しく、そのをり／＼の情をこめこゝろを現はす。

これらの苔石に對して半日靜座すれば數卷の書を読むに勝るものを感じる。

右に近く山椿があり、櫻がある。花は散つて石の邊に或ひは石を掩うて落ちる。花は石にさゝやき、石はこれを悟る。石に情あり、花に心あることを感ずる。

わびすけ椿の下につくばひの水をもとめて鴨、赤腹、ひば、目白、鶯が來る。つくばひの水を飲み、水を浴びてはあたりの梢に憩ふ。小鳥がとまる刹那、今まで何でもなかつた蕭條たる梢が審美的に生きて來る。冬枯れの梢に春が還つて來る。小鳥自身も亦梢にとまることによつて繪畫的な美しい姿を見せてくれる。落花と苔石、小鳥と梢、雨と石、雨と花……自然界のすべてのものは互

に相凭ることによりてその美しさを増し、その美しさを完くする。

ウイリアム・モーリスは雨を愛した。モーリスに日本の雨を見せたら驚嘆したであらう。もし廣重の繪から雨を除いたらさびしいことであらう。

靜かな春雨の日、鹿ヶ谷の法然院に詣し、萬里小路さんにお茶のもてなしにあづかり、雨に煙る吉田山あたりを眺めた日を懷ふ。京の時雨を思ふばかりにも胸はをどる。

雨の音を聽く夜こそ孤獨の身にはわびしくも尊きかぎりである。遠く去つて行つた人も、父も母も寂然としてわが胸に還つて來る。孤獨者にとりて雨は悲しけれど、靜かに遠き日の父母を思はしめ、永劫を想はしめる。

淡 想

おほらかに牡丹は咲けりうす色のセル着しひとを想ふころかな
逢ひたしと想ふ心のしきりなる夜をかすかにも雨はふるなり
茫として過ぎゆくわれの心にも似て泰山木の花白きかな

想ひ出——

大島徹水上人

—相馬愛藏—

私は明治二十年に基督教信者となり押川方義、植村正久、内村鑑三諸先生の教を此の上もなく難有く拜聴致して居りましたので佛教に對しては全く無關心でありました。従つて佛教の先輩に一人の知人もありませんでした。處が私の娘で印度人ボース氏に嫁ぎし俊子が、大正十四年廿八歳で早世致しました時、葬儀に當時佛教界の第一人者と稱された渡邊海旭先生に導師を御願ひしたのが御縁となり、渡邊先生に師事することとなりました。

増上寺の日曜講演に於ける渡邊先生の御話はすばらしきものでありました。私の妻は之の講演を一回も聞き漏らすまいとて、九州見學旅行の際も中途より歸京して、日曜の朝に間に合はせる程でありましたが、昭和八年渡邊先生が御他界なされましたので、我家では中心を失つた様に感じました。すると御弟子の青柳氏が先生と兄弟同様の大島徹水と云はるゝ律僧が京都に居ると語りましたので、早速京都に参り初めて大島師に御會ひ致し、渡邊先生に代りて御指導を願ひ、時々京都に御訪ねする豫定で居りましたが、

佛縁と申しますか、翌九年には増上寺法主として入山せらるゝことゝなりましたので、自然度々御目に掛る機會に恵まれ、我一家の喜びはたとへ様もありませんでした。爾來十有一年、大島上人の溫容に接し種々の教を忝ふしたこと筆紙に盡すことは出来ませんが、茲に二三の逸話をあげて其の思ひ出と致したいと思ひます。

今より三十數年前京都に淨土宗の女學校を設立したが、二年位で存立の見込なく廢校の外なきを見て師は、余に無條件にて任されるならば必ず永續せしめようと之を引受け一紙半錢の御布施も盡く其の基金に加えて、二十三年目に京都隨一の女學校に仕上げ、更に専門學校設立の資金迄も積立られました。之が今日の家政高等女學校であります。師が京都に居られた時、卒業前の生徒に女のたしなみとして便所の掃除をさせると、生徒の母達數名打ち連れて校長室に現われ、自分等の娘に便所掃除をさせられては困ると抗議しました。師は之を聞きて、皆様の御宅では便所は誰が拭きますかと問われると、皆同音に女中に致させます

と答えたので、師は、便所は清潔の上にも清潔にす可き處なのに雇人委せでは決して綺麗にはなりません。其れ故古來之は主婦自身で拭く可きものとなつて居ります。然るに近頃之の良風が廢りましたので、特に生徒に教えたのであります。私も之を職員委せには致さず自身生徒と共に掃除を致して居ります……。抗議の婦人連、オヤ校長先生御自身で、とアツケにとられて非禮を謝して引き取つたと聞きました。

師は齒が無くて御話に不便なのを見受けましたので、私は良醫を撰み入齒の御布施を致そうとしました時、其の醫師は師の御徳に動かされ、入齒の儀は一切自分に供養させて頂きたいと申出られ、私の負擔が全免されたことがありました。

又文士吉田絃二郎氏が、夫人を失ひ悲觀し居る故、何卒兄を慰めて頂き度いと妹さんよりの依頼を快諾されて氏を訪問せられたのが縁となりて、雑誌「浄土」に詩の如き美文を毎號登載さるゝこととなつたのであります。

最後に私自身に關する御導きに就き一言述べさせて頂きます。明治の末期ユダヤ人に依て工夫された百貨店なるものが歐米の街頭に現れ、一所にて何品でも買ひ求め得る便利の爲めに、人々多く此處に集るので、從來の一店一品主義の商店は大打撃を蒙り倒産者續出するの報道と聞き驚き居りし際、早くも我東京にても之にならう者現われ、越後

屋呉服店が率先して三越百貨店となり、白木や、松坂や、松屋等々凡そ十個の百貨店が出来まして、東京都下二十五萬戸の小賣店の總賣上の凡そ四割程も占むる勢となりまして、一般商店の打撃は非常なものであります。

大正十五年の秋新宿に三越の支店が開かれましたので、同じ新宿にある私の中村屋も之が爲めに約二割の賣上減を見ました。そこで私は之の對抗策を研究する爲め昭和三年春歐州視察の旅に上りました。丁度其の頃米國の視察より歸朝した藤原銀二郎氏は、米國人の能率の優秀なるをたゞえ、商人も官吏も職工も我日本に比し三倍の働を爲し居る故、我々も之に劣らざる様勉めざる可からずと話されました。私は歸朝早々百貨店對抗策と能率の三倍以上とを研究致し、略々豫期の効果を挙げました、昭和十五年には中村やの賣上が洋行當時の十五倍となりましたので、最早百貨店恐るゝに足らず、店員の能率も優に三倍となりました。

一日大島上人御來訪の際之の成績を誇り氣に御話し申上げた處、上人は靜かに之を聞かれ、御店が僅か十年で十五倍もの賣上増加とあつては比隣の同じ商賣の店で甚だしく困難する者が出来ませんか。之の點を考えなくてははいけません。茲に一つの昔話があります。

私の郷里から遠くない片田舎に佐吉と云う綿買の商人がありました。正直で親切なので村人に愛され、他の商人には賣らずして佐吉の來るを待つ程なので澤山の綿を集める

ことが出来ました。佐吉の母は留守居の傍ら饅頭を作つて賣て居ましたが、佐吉の近くにも饅頭を賣る店がありました。佐吉の饅頭が大きかつたので、客は皆佐吉の處へ集まりましたので、佐吉は母に、饅頭を隣家同様に小形に作つて下さいと願いますと、母は之に答えて、今の儘でも相當の利分あるのに更に小形にしては御客様に濟まぬと云ひました。佐吉は御客様には他に酬ゆる途もあるが、隣の家がつぶれては何とも氣の毒だと、終に小形に改めて雙方共繁昌しました。佐吉は商買の利益を盡く貯えて相當多額となつた時、村内を流るゝ河に橋が無くて人々の困却するのを見兼て、之に橋を架する事を思立ち、貯金全部を投げ出して獨力で之を仕遂げましたので、人々之を徳と致し、佛佐吉と尊稱して今ま尙相傳えて語り草としています。

私は上人より之の御話を承りて急に眼の醒めた心地がし

谷

紫陽花の葉が

庫裡の廊下を暗くする

山岳はただ一望の緑と化して

瀧のありかも見えなかつた

ある日 凜烈と百合が咲き

この谷間を初夏にした

ました。私は今日迄専ら百貨店の脅威のみを考えて、其の對抗に全力を集中し他を顧るの暇なく、手近の同業者中に百貨店以上に我店を恐れた事實など少しも思い至らなかつたのは、何とも恥しきことと反省されました。然らば如何にせば此等の人々々の迷惑をはぶく事が出来るかと研究を初めました處、戦争の爲め商賣は自然休業となり、引續きて戦災により店も工場も倉庫も、寄宿舎も學校も又私の住宅も盡く焼失し殆ど一物をも残しませんでした。然し私も此の大災難にも案外平氣で居られしは、上人の日頃の御導きに依て、物質にたよることのはかないことが自然に會得し居つたのだと思はれます。さもなかつたら悲觀して絶望に陥るの恐れなしとは申されません。今は唯御預りした物を御返して、却つて安心を得た様な心持で感謝の生活をして居ります。(新宿中村屋店主)

風

鬱蒼たる夏のはじめ

この山寺の書院に

颯颯と響いて來るものは

苦むした塔の頂を鳴らす

一本の蔓の音に過ぎなかつた

木

魚

若林 隆光

木魚を打つ音 こぼ こぼ こぼ こぼ

霧は廻廊をめぐり 池の水は凍る

埋み火をかき起して 炭屑をつぎつつも

たえず聞く木魚の音 こぼ こぼ こぼ こぼ

我が心 こよなくも静かなり

—土田杏村—

涌きたつ様な昂奮の思いも、煮けてしまいたい様な春の懶さも、まことになだめられた赤子の心のような落着いて生々した氣分になつて、次の仕事にむかえるのが、

木魚を打つて念佛を申した功德である。

皆さんは木魚を打つて、念佛を申したことが

ありますか。宗教とは體驗によつて悟られる

眞理である。ところが多くの場合、ひとは常

識では理解出来ないことは誤りと思ひ勝であ

り、宗教を知らない人々は、それを知らない

ために、幻想的迷妄的なものと思ひ込んで居

り、ましてや念佛といい、木魚などと書けば

老人の世迷言、時代後れの象徴の様にしか考

えない。だが宗教を信ずるものにとつては、宗教は活きた眞理であり、その人達の示す力強い生活態度には、唯物論者の様に「抑壓された民衆の幻想的幸福」などと云つて片附けることの出来ないものがあるのは、屢々耳目にするとところである。

この開きはどこから出てくるか。知慧をひろめるのに、生きたものとして受取るか、與えられた動かないものとして受取るか——に歸するのではあるまいか。わからないことは間違いだと言ひ切つて、それに對する新しい興味も起さなければ、理解してみようと努力してもみない無關心さ。電車がこむ—車體が足りないからだ、仕方がない。食糧が足りない—狭い土地、多い人口、肥料の不足、仕方がない。住宅がない、衣服がない、……だからだ、仕方がない。あげて皆正當な理由があり、仕方がない—と事理まことに明白。だがこおやつていたのでは、何時になつたら樂になるだろう。誰が一體救つてくれるだろう。誰でもない、自分達かどうにかしなければならぬことばかりなのだ。

一人一人が體驗を通して活きた知慧をひろめ、一人一人が信仰の生活にいくらかづゝでも入つて行くことが、このカサ／＼した世の

中に油をさすことになる。

湧き立つ心も、ねころびたい心も、ボク、ボク／＼と、木魚にあわせて、ナムアミダ佛／＼と念佛する時に、いつか千々に亂れた心が収まつて、何か云うに云われぬ澄んだ心境になつてしまうことは、たつた一度でも、經驗したこのある人には、不思議にも亦誰でも容易に得られる功德である。

念佛の功德は大きく、有り難いことは聞いていても、案外こんな處から、一回一回と經驗の進むにしたがつて、わかつてくるのが、體驗の知慧の不思議さである。

昔、人があつて、師の教に背いた爲に、後の世に魚と生れ、背に樹を生じて風波の度にゆれただよつて苦しんでいた。たま／＼師の海を渡るにあつて罪を謝して救いを求めたので師は施餓鬼會を修して魚身を脱せしめ、背の樹をとつて魚形を刻み、懸け鳴らして常に衆を誡めたのが、木魚の起りであると云う。

一打一打にこもる誡めの響が、何で功德をもたらさないことがあるうか。寺に詣で、家に歸り、先ず木魚を打つて念佛を申し、然る後生活を論じようではないか。せめて一家一個は備えて、朝夕打ちたいものである。

寺 明 光 の 雨

瀬 初 藤 佐

鎌倉驛から材木座行きのバスに乗り、終點で下車したときは、朝から降っていた雨に潮風が加わり、私は傘をかつぐようにして光明寺の山門をくゞつた。今日はこゝの書院で鎌倉句會と玉藻會との合同句會が催されるのである。

バス降りて潮の香のある春の雨

やよひ

春潮や扇開きに由比ヶ濱 青 霞

門の前は、道路を越してすぐ由比ヶ濱である。

此のお寺は浄土宗の三祖記主禪師の遺跡である。境内の松も、敷石もどことなく寂びて、七百年來の念佛道場という感がふかい。

御名號の碑も古び居り下萌える

初 瀬

はるかに御本堂を拜みながら山門の柱に貼られた小さな道しるべの紙によつて、左へ折れてゆく。庫裡や廊下にはもうちら／＼人達が動いている。句作が始まつているらしい。

下萌えの土びちや／＼と雨た／＼く 立子
友情につ／＼まれ歩き 春の雨 君子
二三人の婦人が目の不自由な句友をいたわりながら、會場にいそいでゆく。

書院には高濱虚子先生、星野立子先生を中心に、大勢の會員がそれぞれ席についておられる。／＼切まであと十分。あわて／＼手帖をもつて廊下に出る。曲り縁を幾曲りもしながら御本堂近くまでも行つてみる。古い歴史をもつ光明寺の庫裡・書院も古びて雨にうたれるあたりの景色は優雅である。ぬれて美しい庭。渡り廊下の左右に咲いている紅白の老梅。

春雨にぬる／＼がま／＼に春の廊 虚子

渡殿は春のしゅう雨のなすがま／＼ 喜太郎

廣縁の前には大きな池があつて叩きつけるような風雨のしぶきの中に、家鴨が四、五羽、ゆつくり首を水に入れたり出したりし乍ら泳いでいる。

家鴨羽をひろげ紫春の雨 虚子

家鴨めす三つおす一つ春の水 虚子

雨の沫きが廊下に佇すんでいる人の近くにまで降りこんでくる。

大風に手洗水飛び椿飛び けん二

小氣味よき春の嵐の一日かな・桃 邑

池の向うの築山の所々に咲いている椿と、青々とした下
萌えとが雨に洗はれて繪のように美しい。

廻廊の幾曲りなる薄紅梅 喜久子

いよく選句がはじまる。会場では東京から遙々参加し
た數人に加え、三十人をこえた會員が列座して、各々静か
に廻つて來る句を選句する。やがて披講にかゝる、廣い書
院もひつそりとして、今はたゞ披講の聲に聞きついている。

當日の兼題は、春炬燵・海苔。

海苔とりのたつきの村も今日嵐 立子

今の世を疲れ居眠り 春炬燵 立子

寢惜しむにあらねど春の炬燵かな 實花

嫁がずに居る身を派手に春炬燵 青霞

送り出して戻れば灯る春炬燵 喜久子

かく在りと老の一日を春炬燵 初瀬

守半のレツテル親し海苔もらふ 初瀬

兩先生選句に入つて聲をばすませて居る顔、落選したら
しい浮かぬ横顔。暫くはどよめく賑かさの一刻である。

いつか雨も止み、本堂からはゆるやかに、木魚の音がき
こえ、境内の古い松の大枝からはぼた／＼としづくが光つ
て落ちていた。

(二一・二八)

行燈の油

一枚の紙も、松下禪尼の手にかければ、立派に障子の破れを
つぐなうのに生かされる。行誡上人は一滴の油にも
いたづらに枕を照らすともし火も

おもえば人のあふらなりけり

という勿體なさを感じられた。いづれの宗教といえど浪費をす
すめる宗教はないが、特に佛教は少欲知足を尊び、ものごとに
つつましくあることをすすめる。古來の佛教者がものを大切に
した例は無数にある。白隱禪師は、ある時信徒に招かれて、法
話のはてにその家に泊つた。床に入つてふと枕もとをみると行
燈がつけてあつた。禪師はこれを吹き消して寢についた。宿の
主人がくらくてはと思つてまたつけると、禪師のいわれるには
「お志しはありがたいが、この行燈は今夜一晩は私に布施され
たもの、従つて私のものだ。だから私の自由にさせて下さい。
私がかねむつている間は光りはいらぬのだから。」
眠つている間に燃える油は死んだ油だ佛教ではものを殺す
ことはまつこおから反對である。殺生はただ生きものだけに
いわれるのではない。すべてものを生かすところを佛教である。

法然上人とその信仰 中村辨康著 定價三〇圓 送料五圓

近代生活に生きる念佛の道を説く好著再版 佛教論叢第二輯 教學院研究所編 定價二〇圓 送料八圓

本宗學人の研究を集結した學術書成る

東京都港區芝公園五ノ一〇

申込所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

僧伽と社會

三寶歸一

佐藤賢順

三寶とは佛と法と僧、すなわち佛陀・達磨・僧伽であります。この三つは何人も據り所とすべく、また尊ぶべきであるという意味で寶といふのであります。既に釋尊在世の頃から、僧團に入る者は、その時の誓いとして三寶に歸依しなければならなかつたのです。三寶を敬うことは、佛道の出發點でもあり中心點でもあります。

佛法僧を、最も手近かな例で示しますと、佛とは繪に描き木に刻んだ佛像、法とは書いたり印刷したりした經典、僧とは髪を剃り衣を纏うた出家であります。これは佛法僧を最も具體的な姿で現したものです。ただそれだけが三寶であると思つてはならないので、それを通してその後にあるほんとうの意味を理解しなければなりません。

三寶の歴史的な起源をお話しますと、佛とは釋尊その人であり、法とは釋尊の説かれた教えであり、僧とは釋尊を中心として集つた同信同行の人達でありました。こうして一應はこの三つが區別されました。しかし考えてみれば、釋尊は單に歴史的にこの世に在りました一個の肉身にすぎ

ないのではなく、佛陀となられた人であります。佛陀となるということとはただの人間ではなくて、永遠不滅の法身(法のからだ)を體得されたことであり、御自身の人格の上に法を實現されたことでもあります。佛は法と一如になつた人格であり、法は佛によつて示された教えでありますから、ここに法佛一如——佛寶と法寶とが一體であるということがいえるのであります。釋尊はしばしば弟子達に示して「法を燈火とし、法を據り所とせよ。」と教えられました。

そこでこの法は、佛の教えとして弟子達を導く燈火となり、弟子達の生活を明るくし清らかにしました。釋尊を中心とする集りは、ただの集團ではなくて、佛の教えによつて結ばれた信仰を同じくし目的を同じくする集りでありました。法が充分に實現されている集りが僧伽であります。こうして法寶と僧寶ともまた一體となるのであります。こう考えてきますと、佛法僧は一應は別々に考えられますが深く究めてみれば、三つは一つに歸するものであることが明らかになります。そこでこの三寶歸一の關係を考慮しつ

つ、その一つ一つを言いかえてみると、次のように言うことができません。

佛とは目醒めることです。自らも目醒め他の人々をも目醒めさせることです。法とは目醒めのための人生が據り所とすべき教えであります。僧とはこの教えに基いて営まれる理想的社會生活であります。

さてそこで佛とは何かということをも、更に深く考えてみましょう。佛とは目醒めであるといいました。それは更に委しく言えば、智慧と慈悲とが全く一體となつてゐる人格ということでもあります。自分自らが目醒めるといふ側からいへば、智慧でありますし、他の人々を目醒めさせるといふ側からいへば、慈悲であります。佛陀においてはこの兩方面が渾然と融和して一如となつてゐるのであります。これを悲智圓滿と申します。もし智慧だけに終つてしまつて、慈悲として働きかけることがないとすれば、それは冷靜なる自己批判、峻嚴なる人生批判にとどまるもので決して救済という暖い導きとはなりません。また逆に、少しも智慧の磨きをかけたことのない慈悲があるとすれば、それは盲目的な愛欲に陥入りがちであります。佛教で智慧といひますのは、知識のことではないので、智慧を磨くといつても、それはただ物識りになるというような簡単なことではありません。それを一言で言い表すのは容易ではありませんが、こう言つたらばよいでしよう——まず自分のありの

ままの姿をよく省みて、私というものが特別に在るのでなく、私は多くの力や働きによつて在らしめられてゐるのだということに目醒め、そこからこの自覺を他のすべての人や物に及ぼして、すべてのものは離れ離れに孤立して反撥し合つてゐるのでなく、互に融け合い結び合つた深い關係にある、ということを知るのです。これがありのままの智慧であります。ですから智慧は私を深く掘り下げたときに得られるもので、私を奥底から揺り動かす力となります。このような眞實の智慧が磨かれれば磨かれるほど、自分心の考え方、暮し方は、その中心を外の方へ移していつて、次第に他人中心に變つていきます。一にも二にも自分の利害のためであつたのが、他の人のためということに變るのであります。ここで智慧は慈悲に轉じ、救済の大慈悲として發動するのであります。單なる愛欲は用捨なく奪い取つたのでありますが、慈悲は惜しみなく與えるのであります。このように智慧と慈悲とが完全に統一されてゐる人格が佛寶であり、その教えが法寶であります。

さてこれほどに尊い佛寶と法寶とがありながら、それは一向に社會生活に實現されていないのは誠に遺憾であります。僧伽は佛教の理想とする社會生活であつて、出家たると在家たるとを問はず、佛を仰ぎ佛の教えに歸依する者を堅く結んだ社會であります。では、現實にある社會と僧伽とはどう違ふかといへば、社會はめいめいの欲望や利害を

中心として、外から結び合わされた集合で、各人が生のさまざまな欲求を満すのに都合のよい集りでありますが、僧伽はこのようなほしいままな動機からの集りではありません。このような動機に對しては冷厳な智慧による批判と内省を加えて、これを内から結びつけるのです。僧伽とは和合衆——平和な社會をいうのであります。現實の經濟的社會、政治的社會は、鬭争と罪惡の暗澹たる渦巻きであり、私利私慾を中軸として繰り擴げられる繪卷でありますから、佛法の實現されない限り、そこから鬭争と罪惡は跡を斷つことは決してありません。組合も議會もそのままでは僧伽ではあり得ないのです。そこで智慧と慈悲の教えによる根本的な批判が必要とされなければなりません。佛教は社會生活の批判原理、修正原理として、つねに社會の中にあつて、社會を越えてゆくのです。宗教の立場は、適應しつつ内在しつつ、同時に修正しつつ超越するのであります。ここに佛寶、法寶の實踐的な力が發揮されます。

釋尊は六年の苦行の後、佛陀となられて、まず初めに鹿野園で五人の比丘に法を説かれました。僧伽の始まりは僅か五人の比丘でした。僧伽はたとえ小さな集りであつても佛の法が實現されている限り、その周圍を動かして、混沌の世相を導き清めてゆくのであります。

僧寶を通して三寶歸一の實を現したいと念願するのであります。(昭和二十四年二月六日ラジオ放送の概要)

靖國和讚

—みたましずめのわさん—

あゝ日の本の新しき 光の陰に散りゆきし
幾千萬の御靈よと 在りし面影懐しみ
袖ふる涙ぬぐいては ひたすら唱え奉る

幾年を経るとも亡き人たちへの思慕は深い。ましてや戦塵の中にたおれた肉親を想うの情は、遺族の人たちにとつては切なき限りである。遺族の一人である中村康隆氏(清水市實相寺)は、その深き詩想を傾けて靖國の靈位を追慕し慰むるに適はしい和讚をさきに作詞發表されたが、之が多大の共鳴を各地によび和讚各流派においてそれぞれ愛唱されるに至り、こんど靖國和讚詠唱會から發行された。

戀しわが父わが夫や 愛しきわが子兄弟

幾山河をへだてつゝ 散りにし御靈今茲に

と、歌詞一讀胸をうつものがある。各地の遺族會、慰靈祭、或は追善供養に、廣く之が詠唱されることを願つてこゝに御推薦いたします。

靖國和讚 黒クローズ裝折本 一部參拾五圓(送共)

申込取次 法然上人鑽仰會

東京都港區芝公園五ノ一〇
振替東京八二一八七番

菩薩像とブローチ

小島章見

一
日本文化の古典の美と伝統的な美しさとは、佛教美術が貢献していること多大であります。私達はただ生きていくとゆうだけではなく、その時代、その社會の一定の文化の線に沿つた生活を欲しますし、そおしなければなりません。然し、そおはいつでも性急に他人の眞似をしたりしてはなりませんし、美しくなければなりません。こおした文化生活に對する批判と、その必要とが、生活のプランの中に強調されるとき、とりわけて東洋的な感覺を強くもつている私達は、美術をめでるということを自らの教養とすることが大切になつてまいります。あなたは東京や、奈良の博物館を御覽になつたことがありますか。また近畿地方の古い寺々を巡拜されたことがありますか。そこには必らず、古い東洋の美があなたを待つてゐることでしょう。

私は、最近流行している——といつても大部下火になつたよおですが——金メッキの大きなブローチをつけている若い女の人達の姿をみると、奇妙に悪い感じをおぼえさせられるのです。何故私がこれを好ましく感ぜぬかという、決してそれがビツタリと、その若い女の人のスタイルに似あつておらず、餘りにも大げさすぎたもので、むしろつけないほおが、その人にとつてどんなにか美しいと思われるほど、何の清楚さもうるわしさも無い、ただビカビカした、奇妙な形にしかすぎなかつたからです。

それとゆうのも、こらみる私の心の奥にはあの美しい菩薩像の瓔珞（おぼろ）（佛像の胸にかけられた飾り）がゆらめき、そしてそれが燃えるが如くに輝いてゐるのを忘れることが出来なかつたからです。誰が何といつても、私は日本の佛教美術の數ある名作の中でも、最も美しい菩薩のよおらくは、繪では法隆寺の金堂壁畫のそれ、國立博物館の藤原時代の様式を

代表している普賢菩薩像（絹本着色の軸）、彫刻では、飛鳥時代の様式を代表する御物の金銅菩薩像のよおらくと、奈良朝初期の白鳳様式を代表する藥師寺東院堂の聖觀音菩薩像のそれであると思ひます。

法隆寺金堂の壁畫は折角ウワアナー博士のおかげで助かつたのに、最近日本人自身の不始末で焼けてしまひ、そこに畫かれてあつた美しいよおらくも永遠に地上からその姿を消してしまいました。古美術を愛する私達にとつてはこれほど悲しいことはありません。世界の人々に對しても申譯けのないことです。しかし、博物館の普賢菩薩像の方のよおらくは、藤原時代の、これまた美しい佛畫で、それは觀音普賢菩薩行法經とゆうお經にとかれてある文句に因んでかかれたものであります。六本の牙のある象の背の上の蓮華座にのる普賢菩薩の梨花の如き白い胸はだは、理智の世界をそのままあらわしたものであり、また完全にしてかけるところのない行圓の世界をあらわしております。こころにくいまでに、古典の白さを代表しているかに思われる靜かなるその胸と、その間にしつかと合掌された御手との間にたれさがるよおらくの、あの一つの凝澗（フロウ）こそは、この繪の中心的な生命であり

普賢の純一妙善をあらわし、普賢とわれ等とともに相い對待しているかのよおな感をいだかしめます。

美しさとゆうものは、眞・善と同様に、人間の心の奥底にまで訴えるものをもつております。こおして、眞にも、善にも、美にもふれることは、また普賢菩薩にふれることでもありましよう。これこそ東洋の古畫の獨壇上であり、日本美術を理解し、深い鑑賞をすすめるうえに、まことに重要な役割をはたしております。

彫刻に於ける飛鳥時代の様式を代表する御物四十八體金銅佛の中の菩薩像のよおらくは古拙の美をあらわす胸綴りの一種で、その様式は遠くギリシヤやベルシヤのサザン王朝時代にもこれを求めることが出来ます。しかし私は何といつても、彫刻に於いてすばらしい美しさを示しているよおらくは、薬師寺東院

堂の聖觀世普菩薩像のそれだと思ひます。あたかも、湯浴みして、いま立ちあがりたるが如く、ま正面に直立したあの姿は、丁度十五世紀の初期、イタリー復興期に於ける宗教的ヘレアの世界、古典の世界をねらい、眞のウイーナスの姿を追求した、ポティチエリのウイーナスの誕生をおもいおこさせ、それと今

この七世紀に於ける、中印度系初唐様式によつたところの、化身にあらざる聖觀音の姿をあらわそおとしたところの、この聖觀音像のスタイルと、その藝術的な氣品とを對照させてみるのも楽しみなことです。あの佛教美術の世界がねらつた、廣々とした大慈悲の胸にたれさがる胸つづりとよおらくの美しさは、またかくべつで、眞に古典白鳳の美しさを象徴したものであるといえます。この聖觀音像のよおらくは、葡萄唐草の模様的一種をあつかつたものと考えられます。冷やかな金銀寶石よりも、ずつと野趣にとんで、いかにも自然的な點で、私はこれが大好きです。現代の若い女の人の間にも、こおいつた美しいよおらくのあることを認め、鑑賞したうえで、あなた自身で、あなたにふさわしいブローチをえらび出していただきたいものです。

三

無量壽經集解に、よおらくとは「常に頸にあるをよおといひ、身にあるをらくとゆう」とあります。一般に胸綴りもよおらくの一種です。そしてこれは昔印度の王侯貴人が、金銀寶珠のたぐいを糸で貫いて、胸から胴にかけて用いた裝身具であつたのです。種類は色

々あつて、金銀寶珠はもとより、十誦律にては、優婆羅華よおらくとゆう、青や赤の美しい、小さな睡蓮の花を用いたのおはじめ、金翅鳥がかならずとまるといわれている極めて香りの高い、黄金色をした瞻葡華よおらくや木犀科に屬する夏生花の白い波師華よおらくなどがあります。これらはすべて花で裝飾されたものでありますが、このほかに、チベツトあたりでは、グロテスクな鬘腰よおらくがあります。

さて、このよおに色々のよおらくが佛教美術にとり入れられて、菩薩像の裝身具とされて來たのでありますが、ここに一つの不思議なことがあります。それはすべての佛像、即ち如來像がよおらくをつけていないのに反して、菩薩像だけが美しいよおらくを身につけていることです。一體菩薩とは何か。ゆうまでもなく佛道（大乘）の修行者のことです。大誓願をおこして、佛國土を淨め、衆生を成就せんがために無量永劫に修行精進し、以つて成佛を期待する大心の上士をさしてゆうのであります。つまり、悟りの道を求め、自利利他のために六波羅蜜を行ひ、大慈大悲にあふれている、その人をさしてゆうのであります。かかる菩薩の像のみがよおらくを身につ

けている理由は、如來像が出家の姿で現わされて、如來像が出家の姿で現わされているのに對して、菩薩の像は在家の居士の姿で現わさるべきものであつたからです。悟りを得た如來は、それ自體無量の清らかさと光明と壽命とを具足せる佛陀でありますから、金銀寶珠のよ、おらくの如き、外に飾るものなどはむしろ邪魔になります。ところが菩薩は佛の境地に到達しよおと努力しているのであります。それ故、菩薩もやがて佛陀となつたときには、やはりよ、おらくをぬぎすてて内なる光りを輝かすよおになることとでしよらう。

四

誰しもうれいに沈んだとき、かなしみに包まれたとき、このよおなときになお己が身をこてこてと着かざりたいとねがう人はないでしょう。むしろ逆に、己が身にまとうものを引きちぎり、叩きすてて、泣けるだけ泣くでしようし、またはじつと靜かにたえしのんで心に佛を念ずることとでしよう。

昔、江戸中期の人に、鳳潭という人があつた。他宗からは慢心増上のもつとゆわかれていましたが、仲々にひろい知識をもつた人でしよ。ある時、彼は觀無量壽經の中の「自絶よ

おらく」とゆう文句を解釋して、これは韋提希夫人がとらわれのかなしみに耐えかねて、自らつけているよ、おらくを絶ちすてたとゆうふうで説いた。これは一般に行われている解釋でもあります。ところが、同じ頃やはり江戸にいた冲默という僧が蕉窓漫筆とゆう本を著わして、自絶よ、おらくの心境は鳳潭の解釋ではものたりない。夫人は單に悲しみうれいのためによ、おらくをつけなかつたのではなくわが子のために幽閉され、悲しみにとざされつつもなお身を飾ることを忘れ得ず、破れゆき朽ちさるものの中になおあくなき美を追求して行つたところに、夫人の凡夫性をまざまざとかがうことが出來ると同時に、ひとたび佛世尊を見たてまつるや、自己の眞實の美しさとゆうものが、そおした外部的な裝飾によるものでは決してないことを知つて、佛知見の前に深く己れを羞じ、自らよ、おらくをつけることをやめたのであると解釋しました。私達はひとくちに愛とか美とかと申しますが、佛敎では「渴愛」に立脚した愛、即ちうばいとろうとするよおな愛、そしてそのため的美しさは「逆い」の原理であるとするのです。飾愛、即ち身を飾ろうとする心も、渴愛と同様に不調和であつて、そこに眞實の美を

求めることは出來ません。

さて、私達の生活には、韋提希夫人が、未だ佛世尊を見たてまつらざる以前、飾愛にほんろうされていた時のよおに、自己にそなわつた本當の美さを知らず、徒らなる外飾美を追つて、それこそ眞の文化的な美だと感ちがいをする場合が多いのではないでしよおか。菩薩のよ、おらくは、決してそおいつた飾愛を増上せしめるよおなものではなく、自然法爾のよ、おらくなのであります。

このよおに、私達は菩薩が自然法爾のよ、おらくをかけるが如く、また韋提希夫人がよおらくを自ら絶つたが如く、行往坐臥、すなわな、美しい生活を求めることに努力すべきでありますしよらう。

法隆寺の火事

金堂の火災で想い出したが、ひと頃學界で再建・非再建の論争が大問題だつたね。

そおだよ。現在の法隆寺が天智天皇九年に罹災して再建されたものか、もとの儘で罹災しなかつたか、とゆうのでね。あの論争の結末はどおなつたのかね。あれあ水かけ論さ、事の起りが火事だから。

童話劇

さ
る
と
か
に

合 田 微 雪

春夫—大きなポケットの附いた服

秋子—赤い元祿のキモノ

(春夫が柿の木の上でおいしそうな實を取つてはポケットに捻込でいる)

秋子の聲(遠く) 春夫さーん

春夫(一寸耳をすます)?

秋子の聲(近く) 春夫さーん

春夫(耳をおさえ首を縮めて獨語) 來なけりやいゝのに

(秋子出てくる)

秋子(まだ探し乍ら) 春夫さん遊ばない?

(春夫かくれる様になっている)

春夫さん、何…(みつけて) あら、そんな所にいたの?

春夫(仕方なく) うん

秋子(熟々眺めて) …大きな柿ねえ

春夫(しぶくくと) 秋子ちゃんにも上げようか。

秋子(大きく唾を呑込み、こつくりする)

(此の時遠くでピアノの音、曲、大國主命)

作者の言葉

優れた童話や童話が、決して大人の藝術に劣つてゐませんのに、所謂童話劇なるものが近頃とかく安價な流行歌やレヴューの影響をうけてゐるのでは?と思はれるようです。いかに児童劇とは申せ、否、それなればこそおろそかになりません。平易に單純化するとゆう事は、一層の磨きをかけることであるべきです。

或る小學校の學藝會で「舌切雀」を出されました。それはあの恐ろしい慘忍な昔噺によつたものではなく、貫い子の小雀がいたづらをして糊をなめたので、やさしいお婆さんが笑いながら「昔噺のお婆さんみたいに舌を切りましようか」と、冗談に言つたのを、子雀はひがんで山の竹藪へ歸つてしまひます。お婆さんは非常に悲しんで、お爺さんに、早く子雀を呼びに行つて下さい、と頼みます。そして出かけようとするお爺さんに、雀の好きなお米の入つた袋を土産に背負はます。

竹藪では、お爺さんの訪れを大變喜び、生みの母さん雀は、小雀のお行儀の悪かつたことを、育ての親のお爺さんに謝ります。お爺さんはお爺さんで、私たちの教育の仕方に落度があつたのですと、また謝ります。そして再び子雀を連れて歸ることになるのですが、竹藪のお家

秋子 アラお姉様だわ（低く口誦みながら遊戯を始める）……を肩に
かけ大黒様が來かゝると、こゝにいなばの白兎：

（春夫青い小さな柿をちぎつて秋子にぶつつけ様とするが、秋子
が、フトこちらを向いたのであわてゝ其柿を服の上ポケットに捻
ぢこむ）

秋子（何も氣附かず）大國主命つていゝ方ね（なおも續くピアノに
うつとり聽き入る。春夫も耳を傾ける。そして何を思つたか、木
から飛び降り、秋子に大きな柿をつきつける。）

秋子 アラ、こんなに大きいのを？

春夫 もう一つ上げるよ、

秋子（びつくりして）まあ！（兩の袂に入れ、嬉し相に抱いてみせ）

こんなに膨れたわ。

春夫 僕のも（とこれもポケットを抱えて見せる。）

秋子（頓狂な聲で）おんなじねえー

春夫（これも負けず大聲で）そうねえー

兩人（顔を見合せ）アハ、、、

秋子 それなにに？（春夫の上ポケットの青柿を覗込む）

春夫（あわてゝ手で押え）何でもないんだよ。

（照れ隠しに大聲で）二人とも同じねえ。

秋子（また負けず大聲で）そうねえー

兩人（顔見合せもう一度）アハ、、、

（依然つゞいて聞えるピアノ、大國主命）

兩人（アハ、、、）

幕

に、お土産にする何かありませんか——いとせめてと、笥
を掘つてきて、お爺さんに背負はせます。——という美
しい真心のストーリー。

思ふに近頃方々で行はれてゐる賈い子問題を劇化した
ものと見られました。悪人を一人も出さず、忌わしい懲
戒劇に仕上がったことが嬉しい。

意地穢い昔噺の儘の「舌切雀」劇をしたとしても、ど
うせ固いコチく、嘘で固めた上滑りの演出ですまされ
るので、却つて仕合せのようですが、其程度で足踏みし
てゐる現状の儘では惜しいと存じます。

「さるとかに」——下手に演出が過ぎると、男の子の純
な靈感が、鼻持ちならぬお説教劇に終ります。右は「生
活の澄み出た劇を」など、口先だけで喧しく言いながら
一向實行されない地方藝能文化への一つの活ともなり指
針ともなれかしと。案ずるよりも生むが易し。純眞なる
子供なればこそ立派にやりおゝせます。

奈良の大佛を立ち上らせるには？

電氣ザブトンを見せる、等々

この間のトンチ教室も鎌倉大佛には及び得なかつたか
ら、こゝに秘策をひとつ。

ではどおしたら鎌倉大佛は動き出すかね？なにわけ
もないことさ。一聲どなればよい。

「スワー・カマクラ」

瞬間

安居 香山

「またくま」とは「まばたくま」であり、上下の脛が開閉する極めて短い時間を言ふ。そしてこの短い「またくま」に何と恐ろしい、又偉大なる事が目に見えず行はれて居る事であらうか。

われわれは「またくま」と言ふ言葉を日常茶飯時に平氣で用ひてゐる。

「あの家はまたくまに出來た」と言ふ。實の所二ヶ月も三ヶ月もかゝつてゐる。物事を大げさに表現する一つに過ぎないが「またたくま」と言ふ言葉の無法な使用法である。

「またたくまに自動車走り過ぎた」と言ふ。大分時間は切りつめられたものの本義には遙かに遠い。これ等に比べると電光や原子爆彈の一闪は確かに「またたくま」と言へるかも知れない。

事の大小、時間の長短と言ふ差はあるが、われわれは等しく「またたくま」と言ふ言葉で表現して居る。この様な輕薄な言葉の亂用は人自身の問題の扱ひ方の亂雑性を示す外の

何物でもない。然しいずれもが「またたくま」と言ふ言葉の本義に遠いものであり乍ら、常に時間が強く意識に上つて居る事は確かである。所がわれわれは同じく時間の中に行はれる事柄であり乍ら、ともするとその時間が忘れられ勝ちである場合がよくある。

「塵も積れば山となる」と言ふ時、塵の小ささに比して山の大きさに驚く。然しそれは山となつた時である。小さな塵は馬鹿にして居ながら山となると驚き、さては崇める。而もこの驚きと崇めは山になつた事の變化に對してであつて、塵から山になつた時間が忘れられてゐる。時間の爲した力が見失はれてゐる。

一瞬間に大都市が消える原子力の偉大さには全く驚歎する。一瞬と言ふ時間と、大きな事の變化が一緒に目立つて居るからである。

塵が山になると言ふ變化は、大都市が消えると言ふ變化に比して優るとも劣らない偉大な出來事であるのに何故、驚きにかくまで差があるのであらうか。言ふまでもない。時間が忘れられてゐるか否かに依るものである。

時間は瞬間の連続。瞬間々に事物の世界は大きく變化して居る。恐るべき偉大な變化が爲されて居る。漫然と時間を考へて居る時、兎角この瞬間の偉大性を忘れてしまふ。

現在われわれは生きて居る。五十年か七十年か兎も角此の時間の中に生きてゐる。而も瞬間の中に生きてゐる事を忘れて居る。

高い理想や夢を插く。實に楽しい。安らかなである。然しそれは長い假空の時間を予想してゐるからに過ぎない。若しわれわれがこの時間を瞬間に切り換へるならば、安閑とはして居れまい。夢は忽ちに破れ、荒涼たる砂漠の中に居る淡い私が自覺されて來る。

邯鄲の夢と言ふ事がある。

昔中國に盧生なる若者が居た。道者呂翁に遇ひ自己の苦衷を訴へた。翁は囊中より枕を出して「これを枕にすれば汝の思ふ通り榮達出來るであらう」と言つた。果せる哉彼は清河の崔某と結婚し、國政にあずかり、趙國公となり、三十餘年の間榮華の極を盡した。ところが欠伸してめざめると、呂翁がたいて居た飯が煮へ切らぬ間の出來事であつた。

若者は現實のほんの幾瞬間かの間に長い楽しい時間を過した。然し元に歸れば相變らずの自己であつた。淡い夢は瞬間を忘れさせる。然し一度瞬間が自覺されるとき人は誰しも冷汗三斗せざる得まい。何故ならば常にわれわれは此の現實の瞬間の竿頭に立たされ、しかも次の瞬間は予測もされず、そして或る

瞬間を經過すればこの私は終るからである。

それでは我々はこの瞬間をみつめておのいて居るだけでよいのであらうか。瞬間はほとんど過ぎて行く。それでよいだらうか。

瞬間は止まる事がない。それは「ただ今」と思ふとき、それこそ「またたくま」に次の瞬間になつてゐる。一體この「今」は何處にあるのか。「今」と言つた瞬間には次の瞬間が來てゐる。秒針の一音そのものである。それでは現在の「今」はなくなつてしまふではないか。

われわれが「瞬間」と考へ得る一點は靜止してゐる一瞬に過ぎない。それは「死んでゐる一瞬」である。然しわれわれが生きてゐる現在は「生きてゐる一瞬」である。過去未來を絶したこの一瞬に尊い血を通はしてゐる。現在の「今」はなくなつてしまふではないかと言つた通り、現在は最早や時間の概念ではない。ただこの一瞬そのものであり、連續を超越した現在があるだけである。時間に生きて居るわれわれは又時間を超越した現在、即ち永遠の現在に生きて居ると言ふ事になる。そしてこの現在の中に偉大なる私の生命が躍動してゐるのである。

この瞬間の超時間性が、直ちに佛の世界に

通ずると、未熟な私には斷言する事は出來ない。然しこの瞬間を忘れる事は出來ない。この尊い血の一瞬を無視する事は出來ない。これを無視する事は私には死よりも怖しい。そして又無視するには餘りに偉大なる一瞬である。

時間は瞬間の連續、と言つた私は、瞬間を追ひつめて行くとき全然逆な事を言はねばならなくなつた。これが非連續の連續と言はれるものであらうが、そうした概念を越えて私には最も具體的な事實としてかく味はれるのである。ともあれ瞬間を尊ぶ故に瞬間に生きねばならない。そこに生の自覺と歡喜がある。

芭蕉は、一句、一句が辭世の句であると言ふ。芭蕉は瞬間々に生きぬいて來た人である。「念々稱名常懺悔」とか、「一念に、一度の往生をあておき給へる願なれば」と言はれた法然上人もこの瞬間に生きぬいて來られた方である。往生をただ未來にのみ見つめて居る時、時間は「またたくま」に過ぎて行く。「またたくま」この語は決して輕々に取り扱ふべきでない事を知らねばならない。

宇宙と極樂

今から一七〇年前、早くも油繪を描いた、近世日本洋畫の祖、司馬江漢はそれだけに西洋科學の新知識人だつた。或る時地圖を開いて天體と地球の話をしてゐると、傍らで熱心にきいていた中年の一女性。

お釋迦様のお生れになつた天竺もよく分りましたが、極樂はさてどの邊でせう。私は生きてゐる内に極樂を參りとおごさいます。さすがは、江漢答えて

それは無理じやな。何故と云つて宇宙には地球と同じように丸い世界が幾つもあつて、その一つが極樂ぢやが、しかしその間はふわとした天ばかりぢやから、生きて歩いては行かれぬよ。この天を飛ぶには魂にならねば飛ばれませぬからの。

この婦人至極がてんして、いよいよ阿彌陀さまにお頼み申す他なしと信心益々固くなつたとゆう。黎明期日本の科學人が説いた一挿話。

浄土思慕

木野 幾世

むかし西行が、長谷寺を訪ねたとき、垣間見た、關河の水を汲みあげる曉の女性、妖艶な女性のそれではないけれど、用意された新しい手桶の浄水を提げていく曲り、この寺の墓石の一番隅つこの、端つこの、母の眠ます前に、私は額いた。戦争から、終戦このかたの、その久しい間に、祖先の墓石を洗うことは今日が始めて。

在りし日の赤門の寺、浄雲寺の敷石を踏む今日、彼岸の中日が恰も母の命日にあたる。たつぷりと水をそそぎ、濡らし參らせて、心足る想いに沈丁花をささげる。ひざまづいて想うことは限りなき潔らかさにかえる心であらうか——ただ在りし日の母の佛に向うとき、心から悩みを告げ、ねぎごとを念ずるのは、母とゆう名のなつかしい存在を地下に生かしている時である。私は數々を念じ、數々を頼んで、いくつになつても人の子の母への思慕、崇さを加へた甘へ心をさへ告げて、すつかり安堵してしまふ。

今までこの墓前に詣つるとき、あの怖ろし

い大空襲に、母の安住するこの寺が、あの業火に包まれた時、想えば墓は最も安全な防空壕だつたかも知れないが、あたり一面の赤い焰でパツパツと包まれたら、どんなにか熱かつたであらう——目を閉ぢてあの夜を偲び、いつも堪えがたいものを想はされた。だのに今日はすつかりそれを忘れてしまつた。

たち上つてあたりを見廻した時、いくつかの墓には心の花が捧げられ、香の煙がただよつて、早春の空気を紫色に染めている。その中に、いく組かの人々が、しづかに立つて禱り、裾をひいて黙し、あるいは合掌する、つつましい姿をみせて居るではないか。これはいままでに見ないとこの現実墓所風景なのである。日頃は轉た荒涼とゆうか、寂寥そのもののようなこの寺も、彼岸に詣でる人々の影のけしきに、彼岸は彼岸らしい佛門歸依の姿を見せている。私は想つたのである。

これこそ慌しいこのごろの生活圏に始めて見せられた人々の心の落ちつき、佛心への還元の姿であると。戦争のために、遠くへ置き忘れてきた宗門の扉を敲く聖なる心の回歸である。しかしそこに響いてききたい聲は、新しい日本の佛教、「浄土」の聲なのである。萬葉の古典を生かして模さず、孔儒の教を受

けて執らはれず、そして往古諸々の聖なる師が説かれた日本佛教の訓しを捧じて、そこに最も生々とした今日の宗教を、より歩み易くより力強く、私たちの心に點火してほしい。迷う小羊の群の福祉の目標にしてほしいのである。

およそ佛心に遠い私ではあるが、今日墓所にみた風影に何ものかの動きを感じ、春燈のかけ夢おぼろに抱いたものはほのかなる佛教執心の萌しである。(三・廿二)

◆和歌山から◆

浄土御苦勞さまです。淺春うす寒い中を走り廻つて、ひとまづ十二名の同志を得、本日も小生とも十三口拂込んでおきました。

處で大野法道先生に經典講義をお願いします。他でも希望されていると思ひます。浄土教の本質——きつと新しい感覺のものをあらわされることと誠に期待します。おつづけを切にお願いします。(和歌山市・谷口眞保)

色々お骨折ありがたく存じます。今後とも大いに同志を弘めて下さい。御希望の點他からも寄せられています。増頁とともに實現してゆきたいと思ひます。(編集部)

三寶の缺損と回復

——淨土教の本質・第四講——

眞野正順

佛と法と僧との三寶が、佛教の最も尊重する中心をなしている事は、汲めどもつきぬ深い意味を含んでゐる。

佛は、云ふ迄もなく、佛教の眞實の中心であつて、理想の生きながらの具現者である。法は佛陀によつて教示せられたる教法であると共に、また、宇宙人生の根本の理法である。法は佛の内容を裏附けるものであると共に佛は法にその眞の中心を與へるものである。

然も、この二つは、その儘では意味をなさない。必ず現實に現はされねばならぬ。社會に實踐されねばならぬ。それは即ち僧である。僧は、佛陀を模範としその教法に従つて理想を實現してゆくものゝ團體である。

(21) この三つの相支ふる構成のもつ深い意味は、おそらく、

佛教がその永遠なる歴史と共に味ひ深めつゝ次第に發展せしめて行くものであらう。たゞ、今の場合、注目すべきは佛教においては、弟子僧に對して、その實踐すべき教法が與へられているだけでなく、その教法の生ける理想的具現者たる佛が目前に與へられてゐるといふ事である。

僧は單に、法にしたがつてのみ、佛教の理想に近づいてゆくのではない。それに優先して、生ける法の完成者を前にしてゐるのである。それは法ではない、理論ではない、生ける完全——佛である。したがつて、さきに述べた法による佛教理解の不完全さは、こゝにはない筈である。なぜならば、生ける理想が釋尊をして目前にあり、その現實の模範に従つて育てられて行くのだから、即ち、法による宗

教的境地表出の不完全さは、佛陀への尊崇と親近によつて救はれているのである。

この様にして、さきに擧げた教法の不完全さは、三寶の組織によつて巧みに補はれて行つた。いはゆる理論のもつての缺陷が、實踐と崇敬とによつて補はれていたのである。こゝに、我々は釋尊の教化の周到なる用意を知るのであるが、しかし、これは單に佛在世のみの機構ではない。佛教の眞の把握のためには必ず常にこの道に従つてゆかねばならぬ事も、併せて忘れてはならないのである。

さて、かゝる間に、やがて佛の入滅は到來した。この佛教を構成する重要な三の棟木の中心材が、今や忽然として地上から消えたのである。

佛滅に遭遇した、諸弟子等の驚愕と動搖とは躍如として佛傳に審しく傳へるところである。彼等は、驚愕し、悲泣し、慟哭し、號叫し、挽轉し、悶絶した。そして口々に叫ぶ「世の光り消ゆ」「大法淪翳す」「群生ほろぶ」「世間の眼滅す」の悲叫は、いつわりなき彼等の眞情であつたに相違ない。

しかし、何事も平板な「法」で説明してしまわねば氣の濟まぬ

後世の教役者は、事もなげに、この深刻なる教團の苦悶を、無常の理に淺い未熟弟子等に歸して、その眞實の意味を蔽ふておる。即ち、こゝに佛教は、それを形成する綱格が崩れたのである。補はんとして補ふ由もなき、樞要なる棟材を失ふたのである。

さらば、いかにして、この缺陷を補ふべきか。佛教によつて、必死なる要請となつて來たのである。古經典も明らかに、この問題を取りあげ、婆羅門をして「世尊を喪つて後比丘等は何を依りどころとするか」と鋭く問はしめておる。(中阿卷三六)

この場合、もし、これが他の種の宗教であつたならば、或はその遺骸に異變があつたとか、或は中空にその姿が現れたとかで直ちに、見えざる教祖の永存を信じたかも知れない。然しながら、それは、佛教を一貫する理性的なる實證的態度が嚴として拒むのである。

それならば、また諸宗教の例にならつて、佛弟子中の勝れたるものを選んで、第二の佛陀たらしむるか。即ち「僧」を以て一佛に代へしむべきか。これに對する答もまた明白である。佛陀に代るべき何者もない。佛寶はたゞ世尊にかぎるのである。經典はこの言葉を佛在世に溯り釋尊の言

として断つてゐる(同上)

然しながら、三寶の中心、佛寶は必ず存せねばならぬ。

そうでなくては、佛教は成立しないのである。こゝに、佛教は喪はれて求めがたき佛陀を求めて苦悶の歴史をつゞけるのであつて、後世佛教の發達は、實にこの苦悶のたどつて行つた長い足跡と見ることが出来る。

しかし、この錯綜した経路を細かに分析するのは本篇の目的ではない。極めて概略をスケッチすると、

はじめは「入滅した佛陀」を歸依の對象とした。(長阿卷七)しかし、佛教の實證的態度にとつて、かゝる「入滅したものの」は、よしや「虚無」とは斷定しなかつたとは云へ嚴乎たる信念の支持者として、安んじ難かつたのは云ふ迄もない。おそらくあの佛教の初期において特に顯著な塔婆の崇拜——釋尊の遺骨や遺物を安置して善美を盡した美術を以て飾つた塔婆の崇拜は、これと深く關聯するのであらう。その崇麗を極めた裝飾に、求めて満し得ざる可憐なる思慕のおもひを汲みとる事ができるのではないか。

つきには「法」を以て代へんとするのである。釋尊は逝いたけれども、その遺法は嚴として残つておる。これは佛をして佛たらしむる佛教の根本である。「法を見るものは佛

を見る」さらば、法こそ滅後の佛であらう。「法と律とは汝等の師。」「自らを燈とし、法を燈とせよ。」

これは教徒として極めて當然なる態度であり、また、こゝに知性的宗教としての佛教のよき特長が現はれており、この傾向が發展して後世佛教の重要な一潮流をなすものであるが、然し、所詮は「法」を以て「佛」に代へんとするものに外ならず、かくして、三寶が二寶となり畢つて、佛教の重要な意味網格を失ふに至るは云ふまでもない。

所詮、「僧」をもつても「法」をもつても、「佛」を補ふことはできない。佛を補ふものはたゞ佛。佛の中に求めてゆかねばならぬ。

かくて、第三の道として、佛陀そのものに還つてこれを反省する方向に向はざるを得なくなつた。そして、その偉大にして圓備せる人格と、深遠なる宗教的體驗の内容を、今更に知る新たな驚嘆を以て反芻しはじめたのである。

思ふにかの教法は、もと佛陀が、時にふれ事にちなんで偶然のごとく散説せられたものである。然しながら、その内容は、たゞかくの如くして流れ去る偶然なものでは決してなかつた。偶然の姿をとりつゝ、その内に永遠に佛教徒が信順すべき眞理を現しておる。佛教もまた、その様なも

のではないか。それは、人間の常凡の相のごとく、成長し
かつ頽老して行つたのであるが、然し、それはたゞ斯くの
如しとして済まされるものであらうか。すでに佛陀は、か
の永遠なる法を説き出し給ふ本源であり、法よりも更に完
全なる生ける眞實そのものである。もし、かの教法が不朽
であるとするならば、その法よりも第一次的にして勝義な
る佛陀は、更に不朽な筈ではないか。

即ち、佛陀は常凡の相を超えたものでなければならぬ。
故に佛陀を見るに、こゝに病める老比丘として見るはその
外形に囚はれて内容を逸するものである。むしろ曇りて淺
き眼をもつ我等の咎となすべきであらう。現實の佛を見る
ものは、眞に佛を見るものでない。理想の佛を見るこそ、
却て、よく眞實を見るものとせねばならぬ。

かくして、釋尊をその未曾有なる眞理の具現者たるに適
はしき姿において見る傾向が初まつた。そして其經路はま
づ釋尊の稀有なる人格内容にふさわしき超人化の傾向に初
まり、その爲、印度民族が傳承的に待望せる英雄の條件と
して數へられていた三十二相、後には八十隨形好のごとき
肉體的徳目が採入れられ、それに、佛陀に特異なる精神的
徳目の數々が加えられて行つたが、やがて次第に、それを

超えて、遂に佛陀の永遠性を暗示するに至り、それが教
に納得せらるゝに及んで、やうやく、この進動は停止し、
一先づ安定を見たのであつた。

具體的に云へば、永遠なる佛陀を、僅か八十年の壽命に
止めたのは、これを懇請せざりし侍者阿難の過失に外なら
ぬとせらるゝに及んで一先づ安定したのである。

そして、この信念を基として、現存阿含經典の編纂を見
るに至つたものと考へられる。經典の編纂は、古來あらゆる
宗教に於て、その信仰がいまだ解決せざる問題を殘し動
搖せる時代に於ては、決して行はれない。信仰がすべてそ
の要請を満足せしめ、安定に見るに至つて初めて行はるゝ
のである。

阿含經典に現はれ來るところの佛陀は、決して常人とし
ての釋尊でなくすべて三十二相等を具備したる超人相であ
る事に深く注目する事が必要である。

かゝる超人相のその裏に永遠性を含める―釋尊に到達す
るに到つて、はじめて、佛教の信仰はその安定を見たので
ある。

すなわち、喪はれたる佛陀は再び歸り來り、缺損したる
三寶は、こゝに回復したからである。

芝園だより

◇爽空一碧、ま鯉ひ鯉が悠々と泳いでいる。浄土も戦後十六頁の狭い住居ながら辛苦努力の甲斐あつて、會友諸氏の要望・後援相次ぎ

は「に」の誤でした。お詫びいたします。今月は雨煙る光明寺での句會隨想。

示したものといい得ると思う。◎いい得るならば、もう少し「浄土」という雑誌を自分のものと思つて、苦言、忠告、進献の寄せられんことを。實のところ、少々はり合ひのない現状。(竹中)

世は淨化されじ。ひたすら温き手をもて、萎えたる手に觸れ得るのみ。(吉田)

◇そこで早速のお客様は新宿中村屋で有名な相馬氏。佛教入信の想ひ出をお願いした。吉田先生の良寛さまとともに超俗非凡の徹水老師の俳をしのびたい。

◇新緑五月ものみな伸びゆくとき教學院の新進、小島・若林・安居諸君に顔を出して貰つた。おなじみをお願いする。

◇世に「サンドウイッチマン」なる商賣あり。喧騒の都大路を、前後に等身大の廣告板を負ひ、いとも鷹揚にねり歩くと云ふ趣向。まさに彼は、廣告板のためのカラクリにすぎず。あわれ、彼が面貌のうつろさよ。

「浄土」五月號
昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和廿四年四月二十日印刷
昭和廿四年五月一日發行
(定價貳拾圓)

◇眞野先生の御健康も回復、四月三日の佛教の時間にはマイクに立たれました。佐藤先生には日曜放送の原稿を頂戴した。こおして諸先生がマイクを通じ、また浄土を通して全国の皆さんに親しまれることは本誌發展の上に嬉しい。

◎内容の一々については編集長の御挨拶もあることでしょうか、とに角、宗門の新進の一つの方向を

◇また世に「モク拾ひ」なる商賣あり。ラッシュアワー直後の停車場等に現れ、こゝかしこ踏みやられしタバコの吸殻を、片端から拾ひ集め、再製すると云ふ段取。洋モクとて、船來タバコの吸殻は、特に高級品の由とか。あわれ彼が指先のひもじさよ。

編輯兼 眞野 正 順
發行人 眞野 正 順
印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田保町三ノ十

◇前月號、佐藤さんの佳句、校正の大ミスで「よき鎌や」とあるの

◎つれづれを忘れるほどに、二十四頁だては急がしい。いざれ捲土重來の日を期して、今月は御覽の如き献立で見参したてまつる。

◇そこらうごめけるは、己が魂を衷ひたる同胞ならずや。いざ比丘達よ、疾く山門を出でて巷間に立て。はや既に誦經念佛にては、現

發行所 法然上人鑽仰會
東京都港區芝公園五ノ一〇
振替 東京 八二一八七番
會員番號 B 一〇八〇一四

◇そこらうごめけるは、己が魂を衷ひたる同胞ならずや。いざ比丘達よ、疾く山門を出でて巷間に立て。はや既に誦經念佛にては、現

會費 概算金貳百六十四圓
一ヶ年 金百三十二圓
半年 (送料共)

東京都港區芝公園五ノ一〇
振替 東京 八二一八七番
會員番號 B 一〇八〇一四

發行所 法然上人鑽仰會
東京都港區芝公園五ノ一〇
振替 東京 八二一八七番
會員番號 B 一〇八〇一四

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月廿日印刷 昭和二十四年五月一日發行

春は新装に乗つて

大學高專服の御新調は

佐々木洋服店

大正大學出張

小修理サービス 毎週月・金曜日

補修更正は念入りにいたします

文京區音羽六丁目廿二・電九段(33) 1647

第十五卷

第五號

大學高專服の御注文は是非

お客様本位の

石橋洋服店

補修更正は迅速丁寧に御奉仕致します

北區瀧ノ川町1941

電板橋(96)1795



石橋洋服店は
こゝです

定價金三十圓(送料二圓)